

アジアン戦国大名
大友氏の研究

鹿毛敏夫著

吉川弘文館

鹿毛敏夫著

アジアン戦国大名
大坂藏の研究



吉川弘文館

著者略歴

一九六三年 大分県に生まれる

一九八六年 広島大学文学部史学科卒業

二〇〇五年 九州大学大学院人文科学府博士

後期課程修了

現在 国立新居浜工業高等学校専門学校准教授、

博士（文学）

東京大学史料編纂所特定共同研究員（併任）

〔主要編著書・論文〕

『戦国大名の外交と都市・流通』（思文閣出版、

二〇〇六年）『戦国大名大友氏と豊後府内』

（編著、高志書院、二〇〇八年）『史跡で読

む日本の歴史八 アジアの中の日本』（共著、

吉川弘文館、二〇一〇年）『日本戦国大名大

友氏の遺明船』（王勇）『人物往来と东亚交

流』（北京光明日报出版社、二〇一〇年、中

文）

アジアン戦国大名大友氏の研究

二〇一一年（平成二十三年）十一月二十日 第一刷発行

著者 鹿毛敏夫

発行者 前田求恭

発行所 株式会社 吉川弘文館

郵便番号 一三三〇〇三三

東京都文京区本郷七丁目二番八号

電話 〇三三三八一三一九一（代）

振替口座 〇〇一〇〇一五一一四四番

<http://www.yoshikawak.co.jp/>

印刷 株式会社 平文社

製本 株式会社 ブックアート

装幀 山崎 登

©Toshio Kage 2011. Printed in Japan
ISBN978-4-642-02903-2

図（日本複写権センター委託出版物）

本書の無断複写（コピー）は、著作権法上での例外を除き、禁じられています。
複写する場合には、日本複写権センター（03-3401-2382）の許諾を受けて下さい。

序にかえて

この一冊は、二〇〇七年から二〇一一年まで五年間にわたる私の研究記録のまとめである。

前著『戦国大名の外交と都市・流通——豊後大友氏と東アジア世界——』（思文閣出版、二〇〇六年）のなかで、私は、九州の戦国大名大友氏の存在について、次のように表現した。

一六世紀の大友氏は、国内史的には日本列島周縁部に位置する戦国大名であるが、中国を中心とした環シナ海域の世界秩序のなかでは、冊封体制下の通交秩序に則った対明交渉者の一員としての姿勢を維持していると同時に、その交渉による実益が見込めないと判断した瞬間からは倭寇的勢力としての実像を顕在化させるといふ、階級的二重性を有する存在であった。

日本の地域公権力である戦国大名（当該地域における「殿様」）を、東シナ海の手賊「倭寇」に結びつけるなど、無礼極まりないとの叱声が聞こえてきそうである。しかしながら、歴史をより複眼的かつグローバルな視点からとらえようとするならば、アジア史や世界史の文脈のなかで日本の戦国大名の存在を位置づける作業は、決して避けて通ることができない重要な分析課題である。私は日本史の研究者であるが、日本国内のみでなく、中国に残存する歴史史料にまで踏み込んで日本の歴史を考察した時、初めて、従来の日本人としての戦国大名像の自己認識に加えて、同時代中国から日本の戦国大名の存在がどう見られていたかの他者認識も見えてきた。

地域分権の時代とも言える日本の戦国時代において、その地域主権を担った各戦国大名のなかでも、大友氏のよ

うに環シナ海域の一角（九州）に領国を有し、大船（一五世紀前半大友親世の「春日丸」や一六世紀半ば大友義鎮の「巨舟」「至南蛮」被差渡候船）等を建造する技術と財力をもち、更に直轄水軍を軸に領国沿岸の海上勢力を組織しうる政治力と軍事力を保持した人物は、中国政府からは、倭寇組織のうちの日本側構成員を統轄・制御する最上級首領と見なされていたに違いない。

これが、前著での他者認識の分析結果である。

過去の歴史学は、日本史の研究者が日本語で書かれた古文書ばかりを分析し、中国史の研究者が中国の史料のみで論文を書き、そして、西洋史の研究者が西欧各国の欧文史料に専念して歴史を語ること、分析結果の不融通性と排他性という大きな苦痛をともなってきた。各専門分野の研究者が、あえて不得意な非専門分野に入り込み、慣れない史料と格闘するなかで、自己の専門分野の研究成果を相対化させること。客観的な歴史科学のあり方をこうとらえながら、いま私はこの一冊を編集している。

前述のような視角から日本の戦国大名の存在を分析する歩みのなかで、前者をまとめる段階では気づかなかった新たな特質が見えてきた。それは、特に、西日本の守護大名・戦国大名から織豊政権、そして初期の徳川政権にまで通底する性質である。そのキーワードは「アジア」。

あらためて言うまでもないが、日本はいくつかに分けてまとめられる世界区分のなかのアジアに位置する。古代の日本は、アジア世界の一員として、特に隣接する中国や朝鮮半島の諸国との関わりのなかで国家を形成してきた。そのあり方は、続く中世から近世への社会においても、基本的に変わりはないはずである。

九州豊後の大友氏の領国制を考察するなかで、私は、次のようなジレンマに陥った。一三世紀の元寇への国防的対

応に始まって、一四世紀には元の高僧と文化交流を行い、一五世紀以降には室町幕府の対明外交の一翼を担って渡船と貿易活動を推進し、また、渡明画家の文化活動を庇護し、一六世紀には渡来明人を待遇し、同世紀後半には東南アジアの「南蛮国」との外交関係の構築と交易を実現した、この歴代大友氏の政策は、日本史で「守護大名」や「戦国大名」と呼称する日本国内の一地域公権力の政権定義の枠組みをはるかに超えているのではないかと。そこに浮かび上がったのは、大陸に近い九州の地の利を活かして、アジア史の史的展開のなかに自らの領国制のアイデンティティを追求しようとする国際的地域政権の営みであった。しかも、そのアジア的志向性は、当該政権の政治・外交・経済・文化のあらゆる面で通底する本質を有している。

そこで本書では、特に一四世紀から一六世紀にかけての大友氏のような大名を、アジア的守護・戦国大名、通称「アジアン大名」と呼称することにした。

以下、第一部から第三部までに、それぞれ三つの章を配置して、合計九つの論考によって「アジアン戦国大名」の姿を浮かび上がらせたい。まず第一部「戦国大名領国のなかのアジア」では、一五・一六世紀の西国大名領国が有する豊かな国際性や海洋性に焦点をあて、そこに潜むアジア的性質を導き出したい。続く第二部「中世九州の都市と唐人・キリシタン文化」では、川と海に育まれた九州の中世都市の構造的特性のなかに受容された「中華」や「南蛮」からの人や文化のあり方を描写したい。そして第三部「アジア社会と大名・禅僧・宣教師」では、一四～一六世紀のアジア社会の流動のなかで、戦国大名の外交使節や日中の禅僧、さらにはイエズス会の宣教師たちがどううごめき、また大名自身が流動する彼らとどう関わっていったのかを明らかにしていくこととする。

この型破りな試論に、ご叱正をお願いしたい。

目次

序にかえて

第一部 戦国大名領国のなかのアジア

第一章 一六世紀の Bungo と大友氏

はじめに——Japan (日本) に並立する Bungo (豊後) ———— 二

一 描かれた「大友宗麟」…………… 四

二 史料が語る一六世紀の豊後府内…………… 八

三 発掘と文献調査が明らかにした「大友館」…………… 九

四 交易都市豊後府内の繁栄…………… 三

五 参宮帳が語る豊後府内の住人…………… 五

おわりに…………… 七

第二章 戦国大名領国の国際性と海洋性

はじめに…………… 一〇

一 海——中世の交易空間——…………… 三

1 守護・戦国大名船の活動と交易…………… 三

2	海の領主の海洋性	三
二	都市と宗教——国際性・海洋性を支える場と思想——	三
1	水辺の中世都市	三
2	中世都市のなかの唐人	四
3	都市信仰の開放性	五
	おわりに	四
	第三章 戦国大名と「南蛮」	四
	はじめに——瀬戸内海を縦断する船——	四
一	一六世紀後半の東アジアの海	四
1	豊後府内から堺へ	四
2	東アジアの世界システムと南蛮交易都市	五
二	戦国諸大名の南蛮交流	五
1	戦国大名の南蛮派遣船	五
2	島津氏・大友氏・松浦氏と南蛮	五
3	象と「象簡」	五
三	南蛮交易都市	五
1	堺	五

2	豊後府内	六
3	平戸	六
4	長崎	六
	おわりに——アジア史のなかの日本——	六

第二部 中世九州の都市と唐人・キリシタン文化 三

第一章 川からの中世都市 六

	はじめに	六
--	------	---

	一 都市の起源と河原市	六
--	-------------	---

1	「市」河	六
---	------	---

2	市の河原と「上市町」	六
---	------------	---

	二 河口と津・浦・浜	六
--	------------	---

1	中世の住吉川河口	六
---	----------	---

2	豊後府内の「外港」	六
---	-----------	---

	三 川からの構造都市	六
--	------------	---

1	豊後府内の「船入」	六
---	-----------	---

2	豊後府内の空間構造	六
---	-----------	---

	おわりに	六
--	------	---

第二章 中世「唐人」の存在形態……………一〇三

はじめに……………一〇三

一 樹岩見山の活動と戦国大名大友氏……………一〇五

二 陳季長の来住とその系譜……………一二三

三 唐人文化の社会浸透……………一三三

おわりに……………一三九

第三章 アジアン大名家から生まれたキリシタン大名……………一三八

はじめに……………一三八

一 「アジアン大名」の伝統……………一三九

二 豊後府内の「タイウスドウ」……………一四二

三 豊後府内のキリシタン遺物……………一四四

おわりに……………一四四

第三部 アジア社会と大名・禅僧・宣教師……………一五二

第一章 日元禅僧の国際交流と大友氏……………一五二

はじめに……………一五二

一 鎌倉・南北朝期の入元僧と大友氏……………一五五

1 大友貞宗と中巖円月・筑前顕孝寺	一五
2 大友氏泰・氏時と中巖円月	一七
二 元僧と大友氏	一八
1 大友貞宗・大蔵永貞と明極楚俊	一八
2 大友貞宗と中峰明本	二〇
おわりに	二六
第二章 日本「九州大邦主」大友氏と中国舟山島	二七
はじめに	二八
一 中国六横島双嶼・舟山島定海と大友氏の外交使節	二九
二 中国舟山島定海道隆観と大友氏の外交使節	三〇
おわりに	三六
第三章 ポルトガル人が描いたザビエルとアジア・戦国日本	三八
はじめに	三八
一 アンドレ・レイノーンが描いた“Life of Saint Francis Xavier”	四〇
二 “Life of Saint Francis Xavier”の解説	四二
おわりに	四三

索引

挿図表目次

第一部第一章

写真1	ペトルス・ベルチウス「アジア図」(部分)	三
写真2	アンソニー・ヴァン・ダイク「St. Francis Xavier before Otomo Sorin, Daimyo of Bungo」	五
写真3	ヴァイセンシュタイン城(ドイツのボンメルスフェルデン)	六
写真4	ヴァイセンシュタイン城の絵画室	六
図 1	16世紀の豊後府内の現在地比定図	二〇
写真5	大友館の庭園遺構	三

第三章

写真1	村上掃部頭(武吉)宛大友宗麟(義鎮)書状	四
写真2	補陀落渡海碑(熊本県玉名市)	五
写真3	「南蛮屏風」に描かれた象	五
写真4	堺出土のタイ産焼締陶器四耳壺	六
写真5	豊後府内出土のミヤンマー産黒釉陶器三耳壺	六

第二部第一章

写真1	豊後府内古図	六
図 1	豊後府内古図の都市部分模式図	六
写真2	豊後府内古図の住吉川河口部分	六
写真3	現在の住吉川と住吉神社	六

図 2	豊後府内の空間構造	六
-----	-----------	---

写真4	杭州湾に注ぐ甬江と寧波の町(中国浙江省)	九
写真5	ホイアンの市場と川・小舟の関係(ベトナム)	一〇
第二章		
写真1	宝成就寺旧跡にのこる古塔碑群(熊本県玉名市)	二〇
写真2	中国産アズライト鉱石	二一
図 1	陳安頂家系図	二八・二九
表 1	陳安頂家当主生没年表	三〇・三一
写真3	西湖(中国浙江省杭州)	三六

第三章

写真1	大友宗麟像	三九
写真2	豊後府内出土のキリシタン墓	四〇
写真3	豊後府内出土のヴェロニカのメダイ	四一
第三部第一章		
写真1	青龍山吉祥寺(群馬県川場村)	四二
写真2	中巖円月像	四三
写真3	顯孝寺旧跡(福岡市)	四四
写真4	明極楚後像	四五
写真5	中峰明本墨跡「大友直庵宛尺牘」	四六
写真6	中峰明本像	四六

第二章

写真 1	現在の双嶼の港（中国浙江省六横島）……………	一七
写真 2	埋め立てて農地化された馬墓港（中国浙江省舟山島）……………	一八
写真 3	かつて道隆観があつた地（中国浙江省舟山島）……………	一八
写真 4	海峡を利用した岑港の港（中国浙江省舟山島）……………	一八
写真 5	山に近い柯梅の村（中国浙江省舟山島）……………	一八
写真 6	大内義長証状……………	一六
第三章		
写真 1	サン・ロケ教会（ポルトガルのリスボン）……………	一八九
写真 2	サン・ロケ教会の主祭壇……………	一八九
写真 3	サン・ロケ教会の聖具室……………	一九
図 1	アンドレ・レイノーン『Life of Saint Francis Xavier』……………	一九一〇
写真 4	聖パウロ学院旧跡（インドのゴア）……………	三五
写真 5	フランシスコ・ザビエル鹿児島滞在の記念碑（鹿児島市）……………	二九
写真 6	福昌寺旧跡（鹿児島市）……………	三〇
写真 7	ボン・ジェズ教会（インドのゴア）……………	三三
写真 8	ミイラ化したザビエルの尊顔（ボン・ジェズ教会）……………	三三

第一部 戦国大名領国のなかのアジア

第一章 一六世紀の Bungo と大友氏

はじめに——Japan（日本）に並立する Bungo（豊後）——

「一六世紀末の日本列島には、二つの王国が存在する。一つの王国は Japan（日本）で、本州全域に広がる最大の国。そして、もう一つの王国は Bungo（豊後）で、九州全体からなる国。」

オランダの地理学者ベトルス・ベルチウスのアジア図。一六一〇年の作成とされるこの地図で、彼は日本列島の状況を右のように考えて地図に表現した。その上の Bungo（豊後）は、Japan（日本）に並立する国として描かれているのである（写真一）。

この地図の表記は、もちろん誤りである。日本の歴史上、現在の大分県に相当する豊後に王国が存在した事実もなければ、その「豊後王国」の領域が筑前・筑後・豊前・豊後・肥前・肥後・日向・大隅・薩摩からなる九州全域に拡大した事実もない。ましてや、その王国が本州に本拠を置く Japan（日本）から独立した国家を形成した事実など、ありえるはずがない。

では、この地図の表記を、単に知識不足のあるヨーロッパ人による日本に対する事実誤認の産物として、片づけることができるであろうか。答えは「否」である。



写真1 バトルス・ベルチウス「アジア図」(部分)

実は、ベルチウス同様の事実誤認は、大なり小なり同じ時期にヨーロッパ人が描いたアジア図や日本地図の大半に見出すことができる。例えば、ポルトガルのイエズス会士ルイス・テイセラが一五九五年に作成した日本地図でも、本州部分を JAPONIA (日本) とし、九州全体を BYNGO (豊後) と表記している。

一六世紀末から一七世紀初頭のヨーロッパ人が九州全体を Bungo と考え、しかも本州部分の Japam とは異なる一国と錯覚した理由は何なのか。ここではむしろ、この事実誤認を起こさせた背景に注目しながら、一六世紀後半の豊後とその政治・社会的中枢として機能した府内(大分市)の大名館、およびその領主大友義鎮・宗麟の特質について言及していきたい。